

総裁候補は語る 大平正芳氏

聞き手・毎日新聞政治部

佐藤後継を目指す自民党総裁選に出馬表明した直後のインタビュー。国際的には、軍事、政治をはじめすべてが戦後の秩序から新しい秩序への変わり目にあることを認識し、国内的には経済成長が生んだ問題を解決する力を組織していくべきだと語る。

こんどの総裁選挙で『脱佐藤』を目ざすといわれていますが……。

「うーん。佐藤さんは、長い期間を通じて手堅くやってきたと思いますよ。そういう時代には、佐藤さんのやり方で大過はなかったといえる。しかしいま問われている問題は、これからの日本を考える場合、現状が変わっただけに取組み方を変えねばならん、ということにアクセントを置きたい」

『政治の流れ』を変えていく、ということですか。

「佐藤さんだけでなく、それに先行する内閣も、どちらかというところ、行政を手堅く進める、ということやってきたという感じがするんですよ。けれども、いま外交も内政も、それから一步出ないといけなくなってきた。行政から政治へと、力点の置き方が変わってこなければ……」

具体的に政治の転換をどうはかるのですか。

「まず、対米関係の取組み方の問題だと思っただけです。佐藤さんまでは、国際政治、軍事、経済問題も含めて、あえていえば米国と同調することが、賢明でもあったし、有効でもあった。昨年あたり

から、ドルの停滞が現実のものとなり、これから軍事、政治をはじめ、すべてが戦後的秩序から新しい秩序への変わり目にかかっているといえるでしょう。世界に対して、日本がもっと積極的な責任を果たす、ということになった。そういうことを考えながら米国ともつき合うという、二国間だけの問題ではなく、もっとグローバル（世界的）な展望になっていかねばならん、ということになった……ということですね。それから国内的には、いままで衣食住の充足ということと、一生懸命やってきた。そのためには、世界経済の中で日本が自立しなければと、なりふりかまわず走り続けた。それは顕著な業績をあげたが、同時にそれが多くの問題を生み落としたわけですね。公害、交通、土地、物価といろんな問題がでてきた。そこでいっぺんふり返って、経済の成長が生んだもろもろの問題を整理して、これをどうするときほぐしていくかということをもっと真剣に取り組んでいかんといかん。国民の願いもまた、むやみな経済の拡大よりも、もっと静かな幸福を求めているに違いないと思います。また、目にみえない世界では、底知れぬ変化が起こってきている。それはあらゆる人間関係に、湧きというか、トゲトゲしさというか、断絶というか、そういうことがまんえんしている。古い人間関係が解体過程にはいつている。経済の成長が、それを助長したと思うんですね。そこで、手間はかかるけど、新しい人間関係はどういうものか、という大きな問題に取組まねばならん局面を迎えている。それは、世界的な問題だと思っんですね。ただ幸いにいえることは、それを解決できる計画力、技術力、財政力をつちかってきたことですね。そういう力を賢明に組織し、動員することに成功すれば、私は日本に未来はあると思っんですねよ。」

大平さんは、立候補にあたって「心のふれあう政治」「汗を惜しまない政治」「ウソのない政治」という政治信条をあげられましたが、自民党にはこつしたものがなせ欠落したのでしょうか。

「私が申上げたことは、いつの時代でも政治はそうなければならんということです。自民党に、そういうものが、なぜ十分でなかったかというところ、戦後ほとんどわれわれの勢力が政権をあずかってきた。長い政権でわれわれに、オゴリがなかったか、これは反省せにやならんと思うんですよ。これが一つ。次に、体制型思考というが、体制になれた思考になじんできた。きのうまで、これでやれたし、きのうまで選挙に勝ってきたということになれてきたと思う。神様じゃないんだから、そういう弱点がある。自民党にまかしておけば、大きな間違いはないだろうと国民は思ってくれているだろう、という漫然とした期待がある。ところが国民の意識はいまや変わりつつある。体制に乗っかっていれば、どうにかこうにかしいでいけるといふことでは満足しないで、この問題はいつまでにどうしてくれるんだ、という目的達成型に移りつつあると思うんですよ。これは、いまの自民党だけでなく、議会政治への警鐘だと思う。こういう点で、自民党はこれから市民の中にはいり込んだ政党活動を精力的にやらねばならないでしょう。自民党の中にも、そういう意識が芽ばえつつありますよ」

中国問題では、どういう取り組み方を考えていますか。

「私が昨年の秋からいつてきていることは、内外の状況が変わってきて、いまの中国政策が間尺に合わなくなってきたというところ。もう一つは、政府が（中華人民共和国との）外交に踏み出す時がきたということなんです。そのためには、国内がまとまらなくてはいけない。コンセンサス（国民的合意）を固めるのがいまの段階だと思いますね」

大平政権で、まずこれだけはやりたいというところは。

「国民がやる気を起こすよつなふんいきをつくる必要があるでしょうね」